

レヴァントへの新人拡散と文化動態

Modern human dispersals into the Levant and cultural dynamics

かどわき せいじ
門脇 誠二 (名古屋大学博物館)

Seiji Kadowaki

● Nagoya University Museum, Nagoya University



Profile
2007年 トロント大学人類学部博士課程
卒業
'09年より 東京大学総合研究博物館
'10年より 名古屋大学博物館

はじめに

人類進化史の中でも、新人の分布拡大や旧人の消滅プロセスの解明を目的とする旧石器考古学が国内外で行われている。その研究では、各地において新人が出現した当初期の記録が注目を集めてきた。それは新人が居住域を拡大したタイミングを示すだけでなく、分布拡大が可能になった要因や、拡散先での適応行動について知る手がかりとなるからである。さらにそれが旧人の分布域だった場合は、そこに新人が侵入し、やがて旧人に勝る人口増加をとげることができた要因についても示唆するであろう。

こうした研究は、日本列島を含め、新人が拡散した様々な地域で行うことが可能である。しかし、グローバル規模で生じた新人の拡散という現象やそれに伴う文化動態のプロセスを解明するためには、各地の事例が相互に比較検討され、それを統合するような説明体系が最終的には必要である¹⁾。

西アジアは、人類がアフリカからユーラシアへ拡散する入口に位置するため、ユーラシア各地の記録が比較・解釈される際のベンチマークとなっている。西アジアの中でもレヴァント地方は特にアフリカに近く、アフリカから連続する地形や環境がある。そこには約200万年前にさかのぼる時期から連続と人類の遺跡が残されており、西アジアの中でも特に多くの遺跡調査がこれまで行われ、豊富な考古・人骨記録がある。

そのレヴァント地方における新人拡散と旧人の消滅（この場合ネアンデルタール）に関する人骨・考古記録の状況や研究課題について、最近、何度か紹介した²⁾。本稿では、それらの課題に基づいて筆

者がレヴァント地方で行っている旧石器時代の遺跡調査について予備的な報告を行い、今後の展望について述べる。

1. 南ヨルダン，カルハ山の旧石器遺跡調査

調査地はヨルダン南部のアカバ県に位置するカルハ山一帯（約3 km 四方）である（図1）。この地



図1 ヨルダン南部の地形図（カルハ山の位置を示す）

域は、死海地溝帯南部と、内陸（東側）のヒスマ盆地のあいだに位置し、標高 1,000 m ほどである。ヒスマ盆地は、カンブリア紀の砂岩が断層と浸食により分断され、メサと谷が発達した地形になっている。カルハ山一帯でも、砂岩の浸食によってたくさんの岩陰が形成されており、その幾つかに旧石器時代の遺跡が残されている（図 2）。

ヒスマ盆地の調査は、アメリカ、タルサ大学の考古学者ドナルド・ヘンリーが 1970 年代から長期的に行い、下部旧石器時代から銅石器時代までの遺跡調査に基づいて、先史時代の文化生態学や文化進化に関する研究が行われた³⁾。カルハ山では旧石器時代の遺跡が 10 地点以上発見・調査されており、中部旧石器時代から上部旧石器、そして続旧石器時代までの文化変遷が提案されている。

この既存編年に基づいて、新人の拡散と旧人の消滅期に相当すると考えられる遺跡の再調査を 2016 年と 2017 年に行った⁴⁾。これまで 5 つの遺跡を調査し、少なくとも 5 つの異なる文化期に区別できる考古資料を採集した（図 3）。最古段階から順に、1) 中部旧石器時代後葉 (Late Middle Paleolithic)、2) 上部旧石器時代初頭 (Initial Upper Paleolithic)、3) 上部旧石器時代初頭～前葉への移行期 (Initial-Early Upper Paleolithic)、4) 上部旧石器時代前葉 (Early Upper Paleolithic)、5) 続旧石器時代前葉 (Early Epipaleolithic) となる。

これらの遺跡から化石人骨は発見されていないが、レヴァントや他地域における人骨記録によると、中部旧石器時代後葉ではネアンデルタール人がいたが、上部旧石器時代初頭以降は新人の人口が増加し、少なくとも上部旧石器時代前葉までにネアンデルタールは消滅していた可能性が高い。

中部旧石器時代後葉（トール・ファラジ遺跡）

以前の調査により 1.5 m ほどの厚さの堆積が確認されている。特に、後世のかく乱を受けていない C 層の堆積物が 10 m x 7 m ほどの範囲にわたって調査され、当時の生活空間の構造に関する研究が行われた⁵⁾。筆者はこれまで 4 m の範囲において、より下層の D2 層と E 層の発掘を行い、石器資料を回収



図 2 南ヨルダン、トール・ファラジ岩陰での発掘調査風景（若野友一郎氏撮影）

した（図 3: 26～29）。C 層の石器群と同様にルヴァロワ方式による剥片剥離が主体で、ポイントや石刃形態もある。

上部旧石器時代初頭（ワディ・アガル遺跡）

以前の調査によって厚さ 35 cm ほどの堆積が報告されていたが、再調査の結果、70～90cm の堆積が検出された⁶⁾。この石器群の特徴は、尖頭状で打面が大きい大型石刃であり、それを素材にしたエンドスクレーパーが採取されている（図 3: 24～25）。また、形態的にルヴァロワ様の尖頭器もある（図 3: 22～23）。ただ、出土した石器群の石核はルヴァロワではなく、単打面のプリズム状石核である。いわゆるエミランの石器製作伝統に含まれるが、単方向の剥片剥離が多いという点で、その後期段階だと判

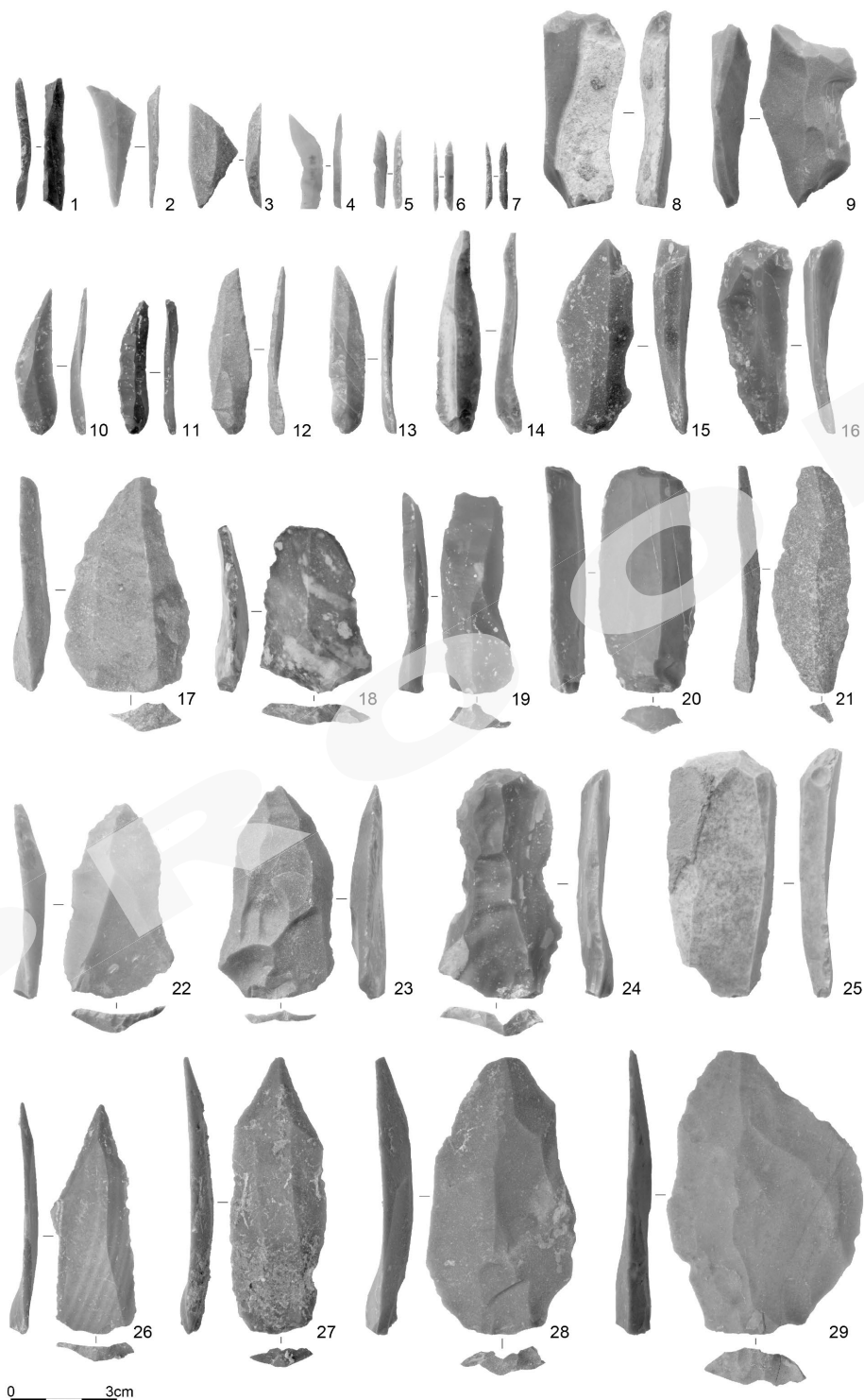


図3 南ヨルダンのカルハ山旧石器遺跡群から発掘された石器資料（渡邊綾美氏作図協力）
1～9: 続旧石器時代前葉（トール・ハマル遺跡 F 層），10～16: 上部旧石器時代前葉（トール・ハマル遺跡 G 層），
17～21: 上部旧石器時代初頭～前葉への移行期（トール・ファウス遺跡），
22～25: 上部旧石器時代初頭（ワディ・アガル遺跡），26～29: 中部旧石器時代後葉（トール・ファラジ遺跡）

断される。より古い段階の前期エミランに類似した石器群は、中央～南東ヨーロッパや南シベリアでも発見されており、その時期に分布拡大した新人の所産と考えられている。

上部旧石器時代初頭～前葉（トール・ファワズ遺跡）

以前の調査で、やはり大型の石刃を特徴とする石器群が発見されている。再調査では3 m²の範囲を30～45 cm発掘した程度であるが、数千点の石器資料が回収された。その技術形態学的な特徴はワディ・アガル遺跡と概ね類似する。剥片や石刃の打面が大きいこと、形態的にルヴァロワ様の尖頭器が含まれること（図3：17～18）、ビュランやエンドスクレーパーなどの上部旧石器的な器種があること（図3：19～21）、である。しかし、その他の剥離技術や年代などの違いから、上部旧石器時代前葉への過渡期という見込みをもっている。

上部旧石器時代前葉（トール・ハマル遺跡 G 層）

カルハ山の旧石器遺跡群の中では最も厚い堆積（2 m 以上）が検出されており、以前の調査によって複数の文化層が認識された。その内、地表下1.3 m程で厚さ約50 cmのG層から採取された石器群は、打面が小さい小石刃を特徴とする。それに微細な二次加工がほどこされ、尖頭状の形態が作り出された資料もある（エル・ワド尖頭器）（図3：10～14）。その他の被二次加工石器は、ビュランやエンドスクレーパーである（図3：15～16）。これらの特徴は、前期アハマリアンと呼ばれる石器製作伝統に対応する。これに類似した小石刃石器群がヨーロッパやコーカサス、ザグロス地方においても発見されている。

続旧石器時代前葉（トール・ハマル遺跡 F 層）

同遺跡の地表下約1 mで、厚さ30 cm～50 cmのF層から出土した石器群は、G層と同様に小石刃の製作や上部旧石器的な石器器種に特徴づけられる（図3：8～9）。しかし、小石刃の比率がやや高く、サイズが若干さらに小型化している。また、新たな要素として、刃つぶし加工とマイクロ・ビュ

ラン技法によって幅2 mm～15 mmの小石器が作られている（図3：1～7）。その形態は、台形や三角形、両端尖頭状など多様である。これらの技術形態的特徴に基づいて、カルハンという石器伝統が定義されている³⁾。

2. 小石刃技術の発達プロセス

この5つの文化期の石器資料はすべて、ヨルダン国古物局の規定に基づく許可の下、借用して日本で分析を行っている。それを通して明らかにしたい問題の1つが、小石刃の発達過程である。レヴァントやヨーロッパなど西ユーラシアでは、小石刃の製作やそれを素材にした小型尖頭器が、上部旧石器時代の示準的な石器技術と従来から考えられている。上部旧石器時代における小石刃の発達は、北ユーラシアや南アジア、中央アジアなどでも広く見られる現象である。

定形的な小石刃は着柄に適しているため、柄の形態や組み合わせ方によって多様な道具の素材として機能する。組み合わせ式の道具は、破損した部分を修理すればよいのでメンテナンス性が高い。また、小石刃製の小型尖頭器は射的具として用いることができるサイズであり、狩猟法の変化を示唆する。さらに小石刃はサイズが小さいので、小さな礫からも製作することができるし、一定量の石材から得られる刃部の長さが上昇する。これらの利点の一部は、上部旧石器時代において新人が分布拡大した際に、旧人に勝る人口増加をとげることができた要因とも考えられている⁷⁾。

この考えによると、小石刃の増加は新人の分布拡大と同期するはずである。確かに上部旧石器時代前葉において、レヴァントからヨーロッパなど周辺地域へ小石刃技術が新人集団と共に拡散したという説がある⁸⁾。しかしながら、それ以前の時期に既に新人が分布拡大していた証拠が増加している。南～東南アジアを通してオーストラリアへ至る南廻りルートの拡散のタイミングが特に早かった可能性が高まっているが⁹⁾、ヨーロッパや北ユーラシアへの北廻りルートでも上部旧石器時代初頭の時期に

新人が分布拡大したと考えられている¹⁰⁾。上記のヨルダンの石器資料では、ワディ・アガル遺跡とトール・ファワズ遺跡が上部旧石器時代初頭に相当する。この早期拡散説が正しければ、なぜその時期に新人が分布拡大できたのか、という問題が生じる。というのも、この時期の石器技術は、以前は「中部・上部旧石器移行期」と呼ばれていたように、中部旧石器時代のルヴァロワ方式のような剥片剥離技術の特徴が残り、後に増加する小石刃や小型尖頭器が有するような利点が分かり難いからである。

ただ最近、上部旧石器時代の初頭でも、小石刃の製作が行われており、その一部に使用痕が認められるという事例が南シベリアやレヴァントから報告されている²⁾。小型尖頭器として器種同定される二次加工はなくても、小石刃の利用が増加する初期段階があったのかもしれない。上部旧石器時代初頭の石器群は、大型の尖頭状石刃が特徴だが、その陰で、後に主体となる小石刃の製作と利用が増えているかどうかを明らかにするためには、石核やデビタージュ全体の観察および小石刃の使用痕分析が必要である。また、それによって明らかになる石器製作と使用行動は、ネアンデルタールがまだいた中部旧石器時代とどの程度違うのか、という点の検討も必要である。中部旧石器時代の石器群にも多少の小石刃が含まれるからである。

おわりに

新人の拡散に伴う文化動態を明らかにするためには、中部旧石器時代から上部旧石器時代にかけての考古記録の変遷を明らかにすることが必要である。しかし、中部旧石器と上部旧石器時代の石

器群は、石器型式や剥離技術が異なるので、それぞれの報告書の記載内容だけでは詳細な比較や新たな属性の検討が困難である。ヨルダンのカルハ山には当該期の遺跡が集中しているため、効率的に実物資料の収集を行うことができた。同じ地域の遺跡なので、石材環境も似ていたはずである。現在、統一した分類と計測方法によるデータの通時的比較を行っており、その結果を今後公表していく予定である。

文献

- 1) 西秋良宏(編) 2016『第1回研究大会 パレオアジア文化史学—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究』東京大学
- 2) 門脇誠二 2017「ホモ・サピエンスの拡散と文化動態」安斎正人編『理論考古学の実践 II 実践篇』同成社、門脇誠二 2017「現生人類の出アフリカと北廻りでのユーラシア拡散」『季刊考古学』第141号
- 3) Henry DO 1995 *Prehistoric Cultural Ecology and Evolution: insights from Southern Jordan*. New York, Plenum Press.
- 4) 門脇誠二ほか 2017「ホモ・サピエンスの拡散・定着期における文化動態—南ヨルダン、カルハ山の旧石器遺跡調査(2016年)」『第24回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会
- 5) Henry DO 2003 *Neanderthals in the Levant: Behavioral Organization and the Beginnings of Human Modernity*. London/New York, Continuum.
- 6) Kadowaki, S. 2017 Technology of striking platform preparation on lithic debitage from Wadi Aghar, southern Jordan. *Al-Rafidan*, 38
- 7) Wakano *et al.* (in press) Ecocultural range-expansion scenarios for the replacement or assimilation of Neanderthals by modern humans. *Theoretical Population Biology*
- 8) Alex *et al.* 2017. Radiocarbon chronology of Manot Cave, Israel and Upper Paleolithic dispersals. *Science Advances*, 3
- 9) 野口淳 2017「現生人類の出アフリカと南廻りでのユーラシア拡散」『季刊考古学』第141号
- 10) Hublin J-J 2015 The modern human colonization of western Eurasia: when and where? *Quaternary Science Reviews* 118